

# 釧路交響楽団の一人としてチェロを演奏したアマチュアによる、その後も重要な音楽監督として演奏上の一団長、平成四年度釧路郷土芸術賞受賞は、昭和三十五年最初の定期演奏会を開き今年十二月十日にはその第二十二回記念として、ベートーベンの交響曲第九番「合唱付」たかどつか」と感慨を

受賞者の横顔

□下□

ターでチェロ・リサイタルを開いた。「住民票」を東京だが演奏活動は釧路人以上」と絶賛されるゆえんだ。

CDレコード初の全国発売  
特別賞受賞を聞き「場違いな人間の受賞では…」と大変驚き、また感謝しています。こういう機会を与えて下さり感激です」とかみしめる毛利さんにとって、東

発売された。本紙に八月末から、「チェロと私」と題し少年時代から東京芸大までの歩みを三回連載したのは記憶に新しい。

ということ。たとえばベートーベンならその音楽の深さを、演奏家として聴衆にきちんと伝えられるかどうか、それには毎日のトレーニングが求められる。またオーケストラというのは社会の縮図とも言えるので、濁りのない心の持ちようも重視されて良い」と説く。

## 楽団の一員で チェロを演奏

を演奏する（釧路市民文化会館大ホール）。毛利さんは誕生間もない同交響楽団の一員としてチェロを演奏し、その後も重要な音楽監督として演奏上の一団長、平成四年度釧路郷土芸術賞受賞は、昭和三十五年最初の定期演奏会を開き今年十二月十日にはその第二十二回記念として、ベートーベンの交響曲第九番「合唱付」たかどつか」と感慨を

込めて語る。加えて「あのシリーズは僕自身にとっても、素晴らしい勉強の機会」と言う釧路市立博物館主催のミュージアム・コンサートにも、十

三回出演という記録を作り、これまでもコンビを組んだピアノの荒谷宏氏（デイスクール・シユル・ピアノ会長）と、今年九月には生涯学習セン

## 釧路交響楽団支え20年

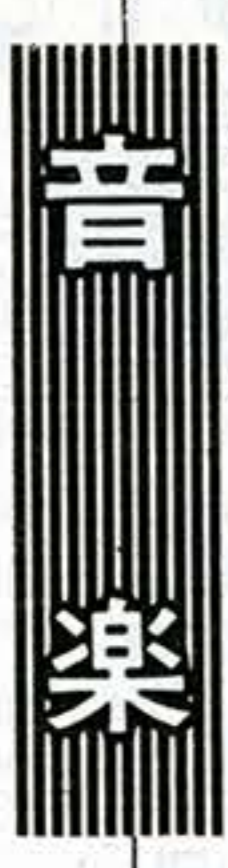
### 指導・教育にも情熱燃やす

#### 東京芸大で非常勤講師も

京―釧路を往復する自らの姿がよみがえる。「交響楽団創立当初の昔ですが、東京からほぼ一昼夜かけて汽車で通ったもの。大きなチェロのケースを抱え、あの青函連絡船に乗っての旅です。今は交通手段が一新されて楽になりましたが」としみじみ。今年他は十月は静岡で、また七月には東京・市ヶ谷の教会で恒例のリサイタルを開き、初のCDレコードが全国

現在、その東京芸大音楽学部の非常勤講師だが、やはりステージでの演奏活動が中心。音楽を演奏することは自分を叱咤（しつた）し、自己を見つめ直し新たな自己認識に到らせると言う。毛利さんはさらに「釧路交響楽団を指導する時、僕が特に要求するのは音の深さを身につけてほしい

## 〈特別賞〉



毛利 巨塵氏（五〇）  
きよじん

（東京都練馬区）



釧路でのリサイタルで熱演する毛利さん